

就学児童の「きこえ」と「ことば」の関わり

耳鼻咽喉科川本医院／奈良市教育委員会

川本 浩康

1 はじめに

奈良市立小学校の特別支援学級在籍者は、少子化傾向に関わらず、平成14年度より年々増加している。その原因は知的障害・情緒障害の増加であり、弱視や肢体不自由などその他の障害をもつ児童数は横ばい傾向にある（下表参照）。知的障害や情緒障害をもつ児童は聴覚で認知し、言葉を表現する能力に遅れがあるといわれているため、「きこえ」と「ことば」の関わりについて調べてみた。

2 調査期間と対象

平成22年度から24年度までの3年間に特別支援学級に在籍した小学1年生累計254名のうち、知的障害・情緒障害をもつ児童149名である。調査票に聴力言語の記載がない例と脳性麻痺や口蓋裂例は除外した。

3 結果と考察

「きこえ」についてしてみると、「聴力検査を実施して正常」と「聴力検査を実施しなかったが見かけ上正常」の合計は141名であった。そのうち、「ことば」の発達も正常な児童が57名（40%）であったのに対し、「ことば」に問題のある児童は84名（60%）もみられた。

「ことば」に障害があるのは「聴力検査を実施して正常」のうち51%、「聴力検査を実施しなかったが見かけ上正常」のうち57%、また「難聴」が明らかかな8名のうちでは62%であった。

以上の結果から、知的障害や情緒障害をもつ児童は「きこえ」が正常もしくは正常に準ずる程度であったとしても、「ことば」を表現する能力に遅れがみられることがわかった。スクリーニング聴力検査の有無に関わらず、聴力が正常と思われても、言語障害が60%もあるので、特別支援を受ける児童には日常生活では見落とされがちな難聴児童の存在が示唆

表 特別支援学級在籍児童数の推移（データを抜粋）

	14年度	17年度	19年度	22年度	23年度	24年度
弱視	6	4	5	4	6	6
難聴	11	9	7	8	8	7
知的障害	86	120	139	153	141	155
肢体不自由	25	29	26	25	25	23
病弱・虚弱（含院内）	21	20	17	12	11	16
情緒障害	59	74	90	135	149	158
合計（人数）	208	256	284	337	340	365

され、簡便なスクリーニングだけではなく、正確な聴力（聴覚）検査と言語教育の必要性を感じた。

平成22年・23年・24年度を比較すると、[聴力検査を実施して正常]と[聴力検査を実施しなかったが見かけ上正常]の児童数に大きな推移はみられないが、そのうち「ことば」の発達に問題のある児童の割合は46%、64%、65%と増加傾向にあった。あくまで私見ではあるが、「ことば」を表現しなくても欲求を満たすことができるようになったマルチメディア社会の弊害、知能や情緒を形成する時期の子どもを取り巻く環境についても提言してみたい。

今回の調査だけでは、知的障害・情緒障害のみが「ことば」を表現する能力を遅れさせた原因なのか、あるいは「きこえ」の悪いことが「ことば」を表現する能力に影響を与え、発達障害を助長させたのかは確かめることはできない。しかし、問診や検査の協力が得られず、十分な精査がされないまま「きこえ」の問題が見過ごされている児童の存在する可能性があり、「ことば」の教育の立場から、適切な聴力（聴覚）診断と支援をしていく必要がある。